

失語症に対する高圧酸素の応用

九州労災病院 高圧医療研究部 林 皓 重藤 脩
同 言語療法士 田上 美年子

緒言 脳血管障害における失語症は 一般に 利き手側の麻痺に併発することが多く、その患者にとって社会復帰はもとより日常生活を行うにあたって大きな障害となっている。失語症に対する治療は現在のところ言語療法士を中心とした言語訓練が主体となっており、これに加えて種々の薬物、或は 常圧酸素吸入を併用する等の試みがなされているが見るべき効果は得られていない。我々は失語症患者に対して高圧酸素と応用しある程度の効果を得たので報告する。

方法 対象患者は図1の如く合計8例で基礎疾患はすべて脳血管障害である。8例中

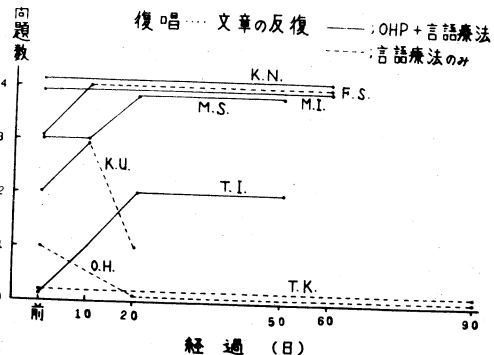
利き手側の麻痺に失語症を併発したものが7例を占めている。すべての症例の治療の主体はあくまでも言語療法士による言語訓練であるが、8例中6例にこれ等の訓練に加えて高圧酸素を応用した。残りの2例はOHPの効果を検討するための比較の症例である。尚、OHPを行った症例の内、2例はOHPを5回行ったのみで、初期にOHPを中断しており、この群はOHP中断群とよぶことにする。加圧

図1

	氏名	年齢	性	診断	ミネツタ失語症分類	利き手	発病後治療開始までの期間	OHPの有無
1	F.S.	64	F	C.V.A (右不全麻痺)	オ1群 単純失語	右	7ヶ月	(+)
2	M.I.	62	M	脳出血 (右片麻痺)	オ1群 単純失語	右	13ヶ月	(+)
3	K.U.	50	F	C.V.A (右不全麻痺)	オ1群 単純失語	右	1年6ヶ月	(+)
4	K.N.	43	M	C.V.A (右不全麻痺)	オ1群 単純失語	左	1年6ヶ月	(+)
5	M.S.	36	M	C.V.A (右片麻痺)	オ1群 単純失語	右	7ヶ月	(+)
6	T.I.	71	M	脳血栓症 (右不全麻痺)	オ3群 感覚運動障害性失語	右	2ヶ月	(+)
7	O.H.	74	M	C.V.A (右片麻痺)	その他	右	7ヶ月	(-)
8	T.K.	66	M	脳硬塞	オ3群 感覚運動障害性失語	右	6ヶ月	(-)

は2.2 A.T.A.まで行い、この圧カ下で、60分間 純酸素を吸入させた。治療期間及び頻度は、次の通りである。即ち OHP、5回目までは隔日に行い、その後は週2~3回、行い、期間は 50日~60日である。尚、この場合特別の薬物併用は行っていない。効果の判定には当院で施行している失語症簡易テストを使用した。このテストは大きく5つの部門より成っている。即ち 発語機能(自発語 発声機能 復唱) 聴取性理解機能 読字機能 書字機能 計算機能である。これ等の部門は更にいくつかの項目に分けられている。テストは 治療開始前と10日後、20日後、50~90日後、に行っている。

図2



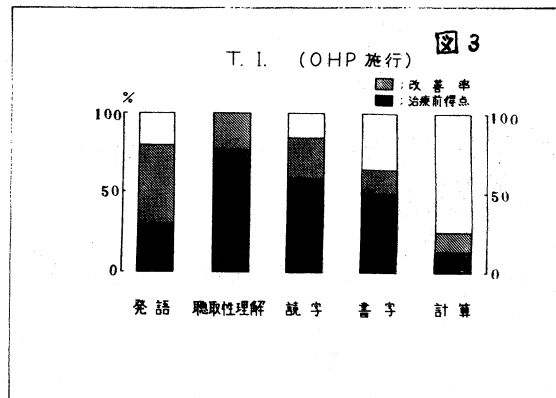
成績 次にこれ等のテストの成績について各項目別に比較的效果の認められたものを選出して述べてみる。

発語の部門の内、自発語 発声機能の項目では OHPを行ったT.I.の症例で著明な成績の改善が認められた。

次に発語部門の復唱の項目をみってみる

と図2の如く治療前より全問正解の2例を除外すると OHP施行例ではすべて1点から2

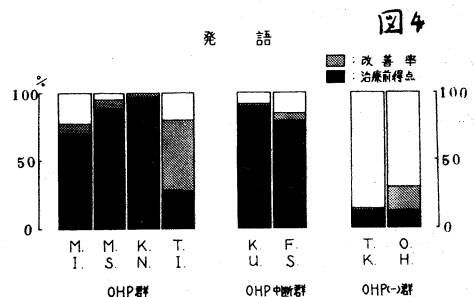
其の改善を認めている。これに反して OHP を施行しなかつた群では改善が全く認められ
 てはいない。又、この図をみても成績の改善は治療開始後 10 日目から 20 日目とい
 う比較的早期に出現しており、言語療法に対して OHP は、その効果の出現をスピード
 アップさせる作用があるのではないかと考えられる。次に聴取性理解の部門では 3 群で
 差異は認められない。次に読字の部門、書字の部門、計算の部門では OHP 群が他の群に
 比してある程度、良い改善率を示してあり、特に T. I. の症例でこれが最もよく現われて
 いる。以上はテストの項目別に症例を比較したものであるが、次にこれ等の症例
 の内、最も治療効果の認められた T. I. の症例について検討する。図 3 は 発語
 聴取性理解 読字 書字 計算 の各部門について それぞれの細項目の得点を
 合計したものを示したものである。これによるとこの T. I. の症例では 全ての
 部門にある程度の治療効果を認めているが、特に発語部門ではその効果は著しく



治療前の得点が 29% であるのに対して最終的得点は 82% となっており、その差は 53% で
 ある。図 4 はこの発語部門について OHP 群、OHP 中断群、OHP (-) 群の各々の最終的治療
 効果を比較したものである。これによると OHP 群では 4 例共、かなりの成績の改善が示
 されており、これを OHP 中断群、OHP (-) 群と比較してみると OHP 群では、ある程度すぐ
 れた治療効果が認められるように思われる。

次に、書字についてみても、この部
 門でも OHP 群では、他の群に比して治療効
 果がややすぐれている。その他の聴取性理
 解、読字、計算、の各部門では OHP 群と他
 の群で特別の差異は認められなかった。

結論 症例が少く、又、結果の考察にお
 いては種々の因子が関与するため OHP のみ
 の効果を抽出することは困難であるが、我
 らは次のような結論を出している。



- (1) OHP 群と他の群で言語療法の効果を比較した場合、OHP 群が低い得点と得た所見は失語症テストのどの部門でも認められなかった。
- (2) OHP 群では 検査 5 部門の内、特に発語部門、書字部門で他の群に比して、治療効果がすぐれているように思われた。
- (3) OHP 群では 言語療法の効果の出現が他の群に比して早かった。
 尚、副作用としては 1 例に加圧によると思われる左滲出性中耳炎の出現とみたが鼓膜穿刺により OHP を継続することが可能であった。